

発表要旨

国東塔の成立 — モンゴル襲来と如法信仰 —

飯 沼 賢 司

国東塔は大正期に天沼俊一氏によって見いだされ命名された国東地域独特な塔である。国東塔に関するこれまでの研究を大まかにまとめると、様式論を中心に編年の研究やその塔の淵源が論じられたものがその大半である。しかし、最も研究の原点である国東塔というのがいかなる役割をもった塔で、なぜ、何の目的で、造られたのかという基本的な問題を本格的に論じた研究がほとんどないのが現状であるといえるのである。勿論、その銘文などから法華経を納入の容器と骨を納入した容器(墓)がある事は既に明らかになっているが、大まかにその二つの用途があったというところで議論が止まっている。

そこで国東塔の造立の目的をその立地との関係からあらためて考えてみることにしよう。国東塔の用途は大まかに二つに分かれるが、これらはその立地が異なっている点に注意しなければならない。法華経納入用に造られたものは、基本的に寺や神社などの宗教施設の深い関係をもっている。特に六郷満山の寺の奥の院や講堂の近くに置かれるタイプがこの典型であり、このタイプの塔の成立は、鎌倉末から南北朝期に集中している。本来、国東塔は国東型宝塔であり、国東町の岩戸寺の境内に立つ、弘安六年(一二八三)の国東塔には「如法経奉納石塔一基」とあるように、如法経すなわち法華経を安置する塔すなわち宝塔に最もふさわしい用途であった。

もう一方、墓として使われるものである。大田村の財前家や国東町の長木家や豊後高田市の熊野墓地などがその典型であ

る。このタイプは、鎌倉末から中世の終末までみられるが、注意深くみると、中心塔として巨大な国東塔が形成されるタイプの墓地では、中心の国東塔は、法華経納入型と時期がほとんど重なっている点である。銘文からみると、寺におかれた弘安六年の岩戸寺の国東塔では、その造立の志は、「当山平安、仏法興隆、広作修善、乃至法界平等利益」のためなどであったが、財前家墓地の国東塔（元応三年）では、その造立の意趣は「現世安穩後世菩提出離生死法界衆生」のためと死後ことを強く意識している。

しかし、永享九年（一四三七）十一月二六日付の信心施主某諷誦文によれば、六郷山では、天台の儀式に則り、埋葬にあたって、五輪塔の造立、初七日から四十九日にかけて四十九鉢の卒都婆の造立、一乗妙法蓮花経一部の書写、妙法蓮花経全部の読誦が行われたことが知られる（余瀬文書）。天台においては、墓でも法華経書写・読誦がなされ、法華経が死者を送る経典として重要な役割をもっている。これは想像になるが、中心に大きな国東塔が置かれ、周囲を小さな国東塔や五輪塔や板碑が囲む典型的な国東の中世墓では、中心塔は本来墓ではなく、死者供養の法華経を納入する装置として造立されたのではなからうか。

国東塔が法華経と深い関係を持ち造立されたことは以上のことから明らかであるが、これらを法華経信仰や天台の信仰の中で改めて位置づけ直すところのようにならざらうか。もともと、天台宗では、開祖最澄以来、法華経信仰がその中軸であった。最澄は、八世紀以来の東大寺（惣国分寺）―国分寺を中心とする鎮護国家仏教に対抗して、新しく天台宗を導入した。最澄は、法華経による国家護持の体制として、法華経千部を安置する玉塔を比叡山に二塔（東塔・西塔）と九州の筑前・豊前に二塔、下野・上野に二塔を建立し、この六宝塔を軸に、国分寺体制の再編を目指した。このような宝塔を中心とする法華経思想は、十一世紀には、法華経を方式に則り書写する功德を強調する如法信仰とさらに末法思想とが結び付き、塚すなわち埋経が九州・畿内を中心に展開してゆく。国東塔も天台の如法信仰や埋経の延長上に位置付けられるのである。

国東塔には、基本的に、笠の下の塔身部に奉納孔が穿たれている。これまで、この穴に注意が払われていただろうか。もし、

経塚の経筒のように、国東塔が造立時点で法華経をいれるだけの容器であったら、このような奉納孔は必要とは思わない。造立の時点で塔身部に笠を載せる際に、塔身の内部に入れ、供養すればよいのである。これは明らかにその後も経などを納入し続けるために開けられたとみるべきであろう。

ところで、南北朝時代以降、如法信仰の新たな展開として廻国聖による六十八部廻国納経が盛んになってゆく。六十八部の納経所は、一国に一、二箇所（寺・神社）が指定され、そこには納経所が設けられ、廻国聖たちは、書写した法華経（如法経）を納めて歩いた。熊野那智大社などは参詣曼荼羅に小さな納経所が描かれている。また、宇佐宮でも応永年間に作成された絵図に上宮の入口に納経所があったことが描かれている。今日残る淡路島の干光寺の鉄の納経塔を見ると、これらは、ポストのように経典を納めるようになっており、国東塔と類似する面をもっている。

改めて、国東塔をその立地からみると、六郷山では奥の院の六所権現へ至る参道の途中にあり、宇佐宮などの納経所と基本的に立地が類似している。また、墓に造られる場合も、その後の供養のため、法華経を入れ続ける必要があり、塔身部に開孔されたとみるべきであろう。六十八部の如法信仰は、南北朝時代に形成されたといわれるが、国東では、すでに鎌倉時代の後期に、納経所としての国東塔が出現していたのとたということになる。それでは、このような納経施設としての塔がこの時代、なぜ国東に出現したかということである。

結論からいうと、最も初期の国東塔が弘安六年（一二八三）に造られたということからしても、文永・弘安のモンゴル襲来が大きなインパクトになったと考えてまちがいない。国東六郷山は、安貞二年（一二二八）に関東（鎌倉幕府）祈禱所に指定されて以来、幕府の安泰のために祈禱を行ってきた。それが、文永のモンゴル襲来以来、異国の調伏の祈禱に切り替わるのである。大般若経の転読、不動行法などの外に、天台の根本経典である法華経の書写・読誦も行われたことはまちがいない。寺内に設けられた国東塔は、山内の安泰を祈るとともに、危機に瀕した国家を護るために設置されたのではなからうか。それがやがて墓の中で行われる法華経供養に用いられ、墓にも納経所が設けられたと考えられるのである。